

中国 偉大な世界

リサ・カルドゥッチ (Lisa Carducci) 著

小池 晴子訳



五洲伝播出版社

中国 偉大な世界

江苏工业学院图书馆
藏书章

图书在版编目 (CIP) 数据

大若天下 / (加) 卡尔杜齐 (Carducci, L.) 著; (日) 小池晴子译; 老杜绘. — 北京: 五洲传播出版社, 2003.10

ISBN 7-5085-0244-2

I. 大...

II. ①卡... ②小... ③老...

III. 随笔—作品集—加拿大—现代—日文

IV. I711.65

Copyright © 2002 by Lisa Carducci

Published by China Intercontinental Press. For information address China Intercontinental Press, 31 Beisanhuan Zhonglu, Beijing, 100088, China.
ALL RIGHTS RESERVED.

Printed in the People's Republic of China

大若天下

著 者 (加) 李莎·卡尔杜齐

译 者 (日) 小池晴子

插 图 老 杜

责任编辑 邓锦辉

封面设计 张 清

出版发行 五洲传播出版社 (北京北三环中路 31 号 邮编: 100088)

承 印 者 北京华联印刷有限公司

开 本 889 × 1194mm 1/32

印 张 6.125

字 数 120 千

版 次 2003 年 10 月第 1 版

印 次 2003 年 10 月第 1 次印刷

书 号 ISBN 7-5085-0244-2/I·34

定 价 22.00 元

目 次

始めに / 1

外国人専家の日常生活 / 4

住宅 / 4

交通機関 / 6

特典 / 16

祝祭日 / 19

減ってきた外国人扱い / 27

老外という身分 / 29

言語とコミュニケーション / 31

ちんぶんかんぶん / 31

コミュニケーション / 32

言語と文化 / 33

すばらしい経験 / 35

拼音と翻訳 / 37

外語（外国語）＝ 英語 / 38

文化の相違 / 40

思考法の問題点 / 40

新しい文化交流 / 44

礼儀について / 46

みんな一緒くた / 50

相手に合わせる・・・これが混乱のもと / 53

就学と就職 / 56

教育 / 56

教育：一つの市場 / 61

学習：人間の一権利 / 64

雇用 / 66

変貌する中国 / 68

めざましい変化 / 68

道徳観 / 75

消えていく生活習慣 / 77

新しい発想 / 82

ホリデー経済 / 82

楽しむ旅行 / 83

合併は一解決策 / 86

銀行ローン / 87

保険 / 88

オリンピック精神 / 90

法律 / 92

ラッキーナンバー / 95

「新新人類」 / 96

インターネット / 97

外来の祭日 / 98

ストレス / 99

改善は進んでいる / 101

衛生状態 / 103

だが・・・ / 104

中国一周 / 105

旅は若者を育てる / 105

北京の中の旅 / 107

雲南の旅 / 108

- 寧波の数日 / 111
山西省に行く / 115
知られざる小さな寧夏 / 117
世界の屋根 / 120
農村の春節(旧正月) / 125
陝北：別の惑星？ / 129

中国への視点を変えよう / 134

- 「プロパガンダ」の意味 / 134
法輪功って何？ / 140
チベット問題の真相 / 151
在外チベット人 / 153

多彩な中国文化 / 158

- 茶芸(茶道) / 158
真珠：宝飾用と医薬用 / 162
すばらしい紙工芸 / 165
あやつり人形と小型立像 / 169
刺繍と錦織り / 172
七宝(景泰藍) / 174
朱泥と黒陶 / 174
色とりどりの工芸品 / 176

結び / 178

- 中国はパーフェクト？ / 178
中国にいる外国人 / 180
改善への道 / 181
個人主義と「個」 / 183
外国はパーフェクト？ / 185
中国に対する懸念 / 186
中国に寄せる希望 / 188

始めに

中国に行くについては三つの理由があった。好奇心と書くことと教えることである。始まりは1985年だった。言語学を学んだ結果、私はアラビア語と中国語に興味を持っていた。どちらを選んだらいいだろう？ 私は迷っていた。アラビアの詩には興味を持っていたが、逆に中国文化についてはなにも知らなかった。どちらにするかを決める前に、中国に行って自分の目でどんな人びとが住んでいるのか見てようと考えた。

そこで私は中国へ行き・・・そして一目でこの国に夢中になった。“Coup de foudre (一目ぼれ)!” たった1ヵ月ではこの国は — いや、この世界はというべきだ — わからない、ここには未知のものがいっぱいある。少なくとも1年間は住みたい。モントリオールに帰るや、私はカナダ世界大学事業機関に希望を出した。そこが私に教職の仕事を斡旋してくれるはずだった。しかし、土壇場でこの話はまとまらなかった。多分、機が熟していなかったのだろう。

1989年、私は研究休暇をとって絵と著作に没頭した。“Stagioni d'amore (愛の四季)” という、転生を主題とした小説を書いていたのだ。そこに描いた四つの人生のうちの一つを、私は中国に設定した。その本に登場する他の国 — イタリア、フランス、カナダ — にすでに行ったことがあるように、中国篇でも同じ経験をしておきたかった。こうして私は2月14日、バレンタインデーにこの国に降りたち、5月

31日まで滞在した。

1990年10月、今度はポーランドでの職に応募してただちに受け入れられた。しかし、一方で私は、「どうしてポーランドなの？ ずっと中国に行きたいと望んでいながら」と自問していた。私はポーランドの機関に対し、私の第一志望は中国なので、契約最終期限までに中国からの招聘状が得られなかった場合にのみ、ポーランドとの契約書に署名したいと通知した。運命は定まっていた。期限は6月3日。さて、その6月3日10時に郵便配達夫が一通の書留便を持ってきた。北京外国語学院からの招聘状だった。

アインシュタインは、「事象が私たちを待ち受ける」と言わなかったかしら？ まったくその通りだった — 人はこれをチャンスとか幸運とか運命と呼ぶ。

こうして私は今中国にいる。私はすぐに安らぎを覚えた。余談になるが、私は、父方からいえばイタリア人だが、カナダ国籍だ。中国に来るまで私は二つの世界に引き裂かれて暮らしてきた — 肉体はカナダにあり、精神はイタリアにあるというふうに。奇跡がどのようにして起きるのかわからないが、ひとたび中国に足を踏み入れるや、私は生まれて初めて故国に帰ったと感じた。私の魂と肉体とは同じところにあった。私はこの非常に満たされた感覚を、ずっと持ち続けていたいと願った — 私のルーツが中国 (Middle Kingdom) の土壌深く根付くまで。

私がこれまでに出した30冊の著書のうち、3分の2は中国に来てから出版したものであり、半分は中国に関するもの、あるいは中国に靈感を得て書いたものである。詩、小説、短編、エッセー — 始めのうちはフランス語かイタリア語で書いていたが、最近の著書は中国語か英語で書いている。その他、2,000ばかりの記事を10数カ国の新聞や雑誌に送ってきた。あらゆる機会に私は、「私の」中国を語ってきた。夫婦の愛が互いの敬意に支えられているように、国家間でも敬

意が欠ければ戦争になる。そして、敬意が欠けるのは相手を知らないからである。中国は非常に多くのものを私に与えてくれたので、私はそれを語らずにはいられない。読者の皆さん、私はこのささやかな経験を皆さんと分かち合いたい。それは皆さんにいろいろな思い出をよみがえらせ、ある時は微笑を誘い、驚かせ — おそらくはショックを与えさえするだろう。私は真実を伝えるふりなどはしない。真実とは人によって受取りかたが違うものだ。皆さんが中国を — このエキサイティングな中国、とてつもない国を — よりよく理解してくださるよう、ご案内ができたらと願っている。

外国人専家*の日常生活

住宅

1991年に戻ろう。当時第二外国語学院と呼ばれていた大学で、私はキャンパス内の外国人教授用家具つき宿舎に部屋をもらった。部屋の両面についているバルコニーが特に嬉しかった。そこで、私はトマトやバジルやニンニクやグリーンピースまでも鉢に植えて育てた。私は、夏の間とても快適なこのアパートが気に入っていた。しかし、冬はひどく長く思えた。暖房が朝6時から8時までしか入らないからだ。その後は教室に居るものとされていた。夜も10時の就寝時間までだった。午後、自分の部屋で授業の準備や採点をする際には、ウールのコートや襟巻きや手袋（そう、部屋の中で！）を通して骨身にしみこんでくる寒さに耐えねばならなかった。ほかに暖めようがないのだ。お湯についても同じだった——朝2時間、夜3時間。教室にも暖房はなかった。授業中もコートを着てブーツを履き、手袋をしていた。教師は、立ったり歩きまわったりできるから多少ましだったが、席に座ってじっとしている学生は、その場で凍りついていた。

新しい校舎が建ち、2年目はそちらに移った。そこはモダンで明るく・・・そして暖房過剰だった。建築家は人間のこ

*外国人専家：教育、技術等各分野の指導に招かれた外国人専門家（Foreign expert）。文教専家、経済専家、科学技術専家に分かれる。

とは忘れていたらしい。窓は開かず、学生たちは授業中眠りこけていた — たぶん、酸欠で新鮮な空気が不足していたのだろう。

1993年、転職によって友誼賓館*に移ってからも、時計の動きに合わせて反射的に行動する習慣から抜け出せなかった。私は、シャワーとか洗髪とか洗濯など、お湯を使う作業はすべて時計をにらみながら計画的に行なってきた。中国に来る前と同じように、友誼賓館ではまた24時間お湯が使えるなんて、なんて素敵なことだろう！

友誼賓館は国の施設であり、いまも外国人はそこで快適に暮らし、保護されている。外国人を闖入者から守るという名目で、中国人は招待状なしには入れなかった。中国人の友人が訪ねてくると、私たちは正門まで出向いて、友人であることを確認しなければならなかったし、さらに各アパートの入り口では、訪問者は招待者立会いで名前を記入し、さらに身分証明書を預けなければならなかった。午後10時半が訪問終了時間で、さもないと「服務員」（ホテル従業員）が電話で知らせてくるのだが、たいていの場合あまり丁寧な対応ではなかった。

「雅園**」の「紅門」は、私にとって、1980年以来よく耳にする改革解放政策の象徴であった。私は、改革開放政策が最もダイナミックに実施された20世紀最後の10年を幸運にも経験することができた。1993年、自分の住んでいる敷地に入るために通り抜けなければならないこの「紅門」

* 友誼賓館：1954年ソ連からの技術指導者を中心とする外国人専門家宿泊を主たる目的として建てられた国営ホテル。冷暖房、給湯、バスタブ・シャワーつき浴室、水洗トイレ、広い庭園など、当時としては特権的な設備を完備、専家を優遇していた。

** 雅園：賓館敷地内には数カ所に長期滞在専家用の居住区があり、それぞれ「雅園」「頤園」などと名付けられている。紅門は雅園の入口。赤い円形の中国風の門だった。日本人専門家たちはこれを「赤門」と呼んでいた。

は、23時に閉められ錠がおろされた。遅れて帰ってきた者は、夜勤の服務員に頭を下げて開けてもらわねばならなかった。ある日、門は23時に閉められたが・・・しかし、錠はおろされなかった。1、2年後、門は半開きのままとなり、それから開けっ放しとなり、ついに1999年、門そのものが取壊された。長く住んでいる住人にとって、「門があった場所」は今も「紅門」である。いまでもときどき、私たちは新しくやってきた人との待ち合わせ場所に「紅門」を指定する。彼らは探してみるが、どこが「紅門」なのかわからない。

交通機関

最初の中国旅行で強烈に印象に残ったのは自転車の数である。1997年にアムステルダムに行ったとき、友人が私を橋の上に連れて行き、立ち止まって私の反応を待った。「私に何を言わせたいの？ それとも見せたいの？」と私は尋ねた。彼は自転車の群れを指さした。私は言った。「まあ！ 私が中国に住んでいることを忘れたの？ こんなもの珍しくもないわ」。

中国の自転車で驚いたのは、みんな黒色で同じサイズで同じ型だったことである。当時は誰も自転車を盗まなかったのでロックする必要もなかった。

北京に来るまで私は自転車に乗ったことがなかった。何回か練習してみたが、体のあちこちに大きなナスのような黒いあざを残しただけのみじめなものだった。しかし、北京に来たら郷に従えとまた挑戦した。私はキャンパス内で校舎の移動にだけ使った。たった一回門を出て郵便局に行ったことがある。それは数分の距離だったのだが、私はまったく気がつかず、郵便局を3、4キロも通り越してやっとUターンした。しかし、このとき分かったのは、自転車に乗った私はみんなにとって危険物であり、だから、やめたほうが良いということこ

とだった。

当時、自転車は家族全員を運んでいた。父親がサドルに乗り、母親は後部の荷台、赤ちゃんは母親が抱くか、さもなくば、ハンドルの前にとり付けた竹の籠に入れていた。

市民の数だけ自転車があったものだが、事情は一変した。車が自転車用のレーンに進入して妨害するばかりでなく、運転手は自転車に乗った人に向かってクラクションを鳴らして、道をあけさせる始末である。少しずつだが、警官が監視するようになり、事態は正常に戻ってきている。

上海では、自転車は社会的な迷惑行為と見なされ、市当局はあらゆる手段で排除しようとしている。自転車は空気を汚さないし騒音も出さない、ほとんど場所をとらないし健康にも役立つ。こんな好ましい種族が、不当にも非難されて絶滅に瀕しているのを、私たちは傍観していなければならないのだろうか。

私は1989年に北京を去り、2年後に戻ってきたのだが、最初の驚きはなんと車が増えたことか、ということであった。それは口バのひく荷車贅沢な観光バスまでもしいでしまっていた。そのとき、この人口1,000万から1,200万の都市で中国人が皆自家用車を持つようになったら災難だと思った。そう、その災難が現実となりつつある。1995年から1999年にかけて深刻な駐車場問題が起きた。車は大通りの歩道や、胡同とよばれる路地にまで入り込み、歩行者はもはや歩く権利までなくしてしまった。一方でいろいろな改善策も講じられ、駐車場が作られたりして秩序が回復してきてはいる。しかし、たいへんな車の数で、いまやこの都市は北アメリカの大都市と似ている。

私自身は、国は車の増加を規制すべきだと考えていたが、国家開発計画によるとむしろ逆で、車は経済発展の柱とみなされている。これは、直接、間接にどれほどの人口が国が養わなければならないかを考えると、分からなくはない。

単位*は従業員に車を提供するよう国から奨励され、個人もまた自家用車を買うよう奨められている。中国人は自家用車を「家族車」と呼んで、「単位用の車」と区別している。

「北西情報新聞」が中国57都市の消費者2万2,800名を対象に行なった調査によると、調査対象者の12パーセントが、中国のWTO加盟後（これによって車の値段は下がる）車を買う計画を持ち、29パーセントが銀行ローンを利用したいと考えている。

交通の流れが改善されるならば、バスの台数やバス路線が驚異的に増えているのは悪くない。ある市職員の話によると、2000年度の北京市バス路線図は平均20日ごとに書き換えねばならないほど頻繁に変更されたという。

さらに、幹線道路ではバス専用レーンが設けられている。世界の近代的な大都市で実施されている対策も導入されるだろう。例えば、一人しか乗せていない自家用車やタクシーには罰金が科せられるとか、市の中心部への乗り入れ制限、駐車場制限もしくは料金アップ、都市では自転車やバス優先、といった対策である。自転車用レーンに侵入してくる車には重い罰金を科すべきだろう。こうした対策が現在検討されており、中にはすでに実施されているものもある。しかし、いまのところ医者より患者が多いというのが実情である。

四環路**の建設はすでに完了した。三環路の出入り口はより効率的に改修され、いま五環路の建設が始まっている。

*単位：よく「職場」と訳されるが、その包括する概念はもっと広く、都市部のすべての企業、機関、学校、各種団体など社会を構成する組織を指す。各個人はかならずどこかの単位に所属している。

*四環路：北京市街区をとり巻く環状道路。故宮を中心に二環路から始まる。

車（と未熟なドライバー）の増加によって、交通事故が1996年から1999年にかけていちじるしく増えたため、厳しい政策がとられた。市民の生命を守るため、高いがんじょうな中央分離柵を設けて、横断歩道、歩道橋、地下道以外の場所では道路を横断できないようにしている。交通信号も設置されたし、交通指導員が出て（まだ数は少ないが）せっかちな歩行者と運転手双方に信号を守らせている。

にもかかわらず私の眼から見ると、中国の平均的なドライバーのレベルは非常に低い。中国では、警官の姿が見えなければ路上でなんでもありだ。例えば、私道から突然とび出して強引に車道に割りこみ、車の流れに入りこむ：右折車も、左折車も、道路を正しく横断している歩行者を優先しない：右側車線で追い越しをかけるドライバー等々よく見かける。その上、免許証が交付されたといっても、新米ドライバーの多くは、教習所で練習しただけで、路上教習を受けていない。

タクシーの数は、私が中国に来てから10年の間に飛躍的に増えた。1991年には北京市内で1万6,000台だったのが、2年後には5万7,400台、1997年には9万台になった。1998年末には、首都圏のタクシー会社は1,000社にのぼった。料金は比較的安く抑えられているので、タクシーはほとんど誰にでも利用できる。

乗車拒否とか料金のごまかしといった行為は以前に比べて少なくなった。とはいえ、運転手の中には、市内から空港への路線のように、帰りの乗客が乗せられないと予想される路線ではいまでもメーターを使わない者がいる。彼らは不当な料金をふっかける。特に言葉が通じず、交通規則、距離、行程、料金などについてなにも知らない外国人とみると、ふっかけてくる。その他、どんなことが行なわれているか、いくつかあげてみよう。

第1は、秩序維持と称して、北京西駅と北京駅では、1.6元*タクシーしか客待ちの列に入る権利を認められていない(1元=0.12 US\$,あるいは0.14ユーロ)。運転手は、客の乗せこみをする整理員に1回につき1元ずつ払わねばならない。まったく小マフィアだ! 仮に乗客がメーターを立てるよう要求しても、料金は同じ距離を市内から駅に走ってくる場合よりも、駅から出て行く場合のほうが常に高い。メーターに細工されているからだ。



乗客は領収書をとって、こうした事実をタクシー会社に通報することができる。苦情はかならず受理され、やましい運転手はただちに言いわけをしながら、だました客に金を返す。しかし、ほとんどの外国人は、この消費者保護策を利用しない。一つには言葉が通じなかったり、あるいは旅行者である

*北京のタクシーは初乗り料金によって1.2元タクシー、1.6元タクシー、2元タクシー(ハイヤー)の区別がある。以前あった1元タクシーは今まはない。

ためにこの権利の存在を知らないからであるが、多くの場合は、例え少々ごまかされても、自分の国のタクシー料金よりずっと安いと考えるからである。それでは、中国人はどうなのだろう？「まるっきり気にしないよ」と、あるタクシー会社の社長は話していた。

第2に、北京駅の北口から出た場合、タクシーは東方向にしか走れないことになっている。この駅の場合、乗客が西、北、南方向に行きたいというと、最初の2キロはまず南口に出るためだけに費やされる。

最後に、1.2元タクシーを利用したいと思うなら、乗客は重い荷物を引きずって駅から遠い地点まで歩かねばならない。この安いタクシーは、駅前、ないしは駅の近くで客を拾うことを禁じられているからだ。

しかし、すべての運転手が不正というわけではない。それどころか、客が車内に忘れた物 — 財布、携帯電話、パソコン、ブリーフケースなどを料金もとらずに届けに来る運転手もいる！

2002年初頭以来、北京で紅い星型ライトをつけて走っているタクシーを見かけることがあるが、これは人道的あるいは英雄的行為に対する褒賞で、ごく少数の選ばれた運転手にだけ与えられている。特に北京では、2008年オリンピック開催権を勝ちとって以来、英語を学ぶために夜間学校に通ったり、外国人乗客と会話したりするタクシー運転手が（公務員も）急増している。

近年、環境保護政策も急速に進み、特に北京オリンピック誘致運動前後に活発だった。その結果の一つとして、面的(miandi, 食パンの意)の名で親しまれていた1元タクシーが1998年に消えた。この車は無鉛ガソリンを使えないからだ。

1993年には、安全ベルトの着用も義務づけられた。ドライバー、乗客とも締めていないのをよく見かけるが、とに